

立命館大学理工学部 学生員 ○藤本 妙子

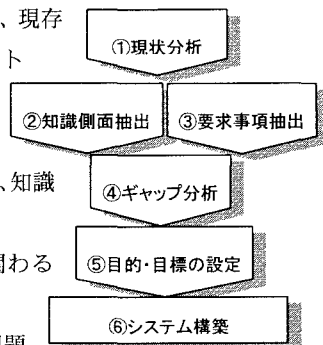
立命館大学理工学部 正会員 笹谷 康之

1. はじめに

近年、ISO9001 や ISO14001 に代表されるマネジメントシステムを導入する企業は増加の一方である。しかしながら、その導入はあらゆる組織において有効なものではなく、その規模や存在目的により効果が異なる。今回 IMS を導入した景観計画研究室は、20 人程度の小規模な組織である。そして、その存在目的は論文より多くを發表すること、つまり知的生産性を向上させることにある。しかし、構成員が流動的であるため、研究室の知的財産が効率良く蓄積されていない。そこで、研究室にふさわしいマネジメントシステムを構築し導入し、研究室内の知識経営を試みる。そのシステムを知識・環境統合型マネジメントシステム（IMS）とする。

2. IMS 構築の手順

- ① 研究室の業務分析、現存文書・記録をリストアップする
- ② KJ 法によるワークショップを行い、知識側面を抽出
- ③ システム構築に関わる法律その他の抽出
- ④ ②③を比較し現問題点を浮き彫りにする
- ⑤ 目的・目標の設定
- ⑥ 以上の結果を元にシステムの構築を行なう



3. IMS マニュアル概要

- ①IMS マニュアルは、景観計画研究室におけるシステム推進のためのマニュアルとする。
- ②IMS とは、研究室内に属するあらゆる「情報」「データ」「経験」「知恵」を効率よく利用し、新たな知的生産につなげるためのシステムである。
- ③IMS は、¹⁾ 京都環境マネジメントシステム・スタンダード（KES）STEP2 を組み込んで、維持する。

④IMS ではPDCA サイクルの導入により、継続的な改善を行う。まず、PLAN では研究室の現状分析（知識側面の評価）を行い計画をたてる。DO ではその計画の実施、CHECK にて内部監査員によりこのマネジメントシステムが正常に動いているかの調査を行う。そしてその結果を基にして最高責任者評価を行い、ACTION としてまた新たな計画をたてる。このサイクルを持続的に回すことで、研究室の知的生産性を高めるだけではなく、組織力を強めることとする。

⑤IMS では研究室を知的生産の場と位置づけ、以下の6つの方針に基づきマネジメントシステムを推進することとする。

i) 能力開発

計画、IT、マネジメントに関するリテラシーの習得はもとより、社会人として役に立つ人材として常識的な態度・知識・技能を修得し、専門的職業人（プロ）を育成する。

ii) 計画の理論と手法の研究

景観・環境・まちづくり・地域情報化等に関する計画の理論と手法を開発し、ハイクオリティな研究内容を追求する。

iii) 計画支援システムの開発

経営資源・研究資源である「人・モノ・金・情報」と、効率的に研究活動を進める上で重要要素である「時間」を、効果的に利用できるシステムの開発を行い、計画策定の支援システムを構築する。

iv) 計画の策定と進行管理

景観・環境・まちづくり・地域情報化等に関する学術的に確立された、あるいは当研究室で開発した計画の理論と手法に基づき、行政計画やパートナーシップ計画等の策定や進行管理を支援する。

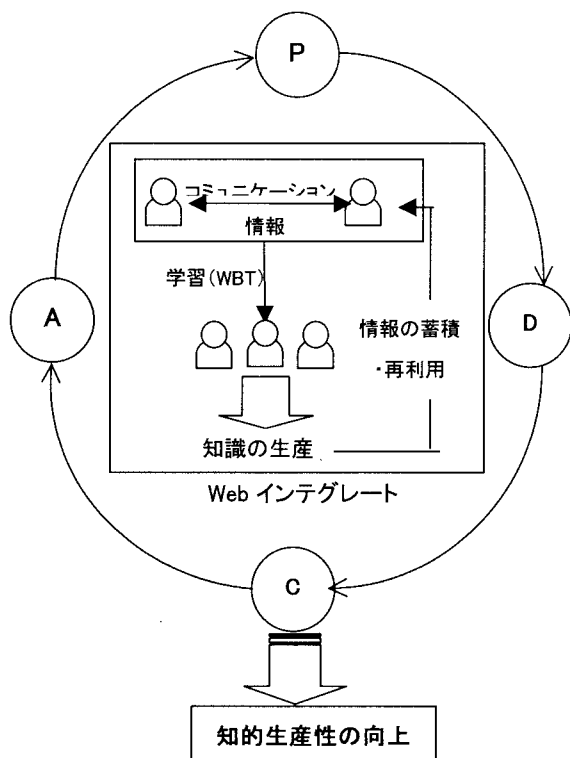
v) 省エネ・省資源

環境問題の重要性を認識し、各個人がエネルギーの節減や排紙類の再利用等の省エネ省資源行動を推進し、研究室活動を通じて環境負荷の低減に努める。

vi) グリーン購入

研究活動に必要な文具類や備品等は、環境に配慮した製品・商品を積極的に購入し、研究室からグリーン購入運動を普及・啓発を行う。

4. IMS 概念図



5. IMS 規格に採用すべき項目の提案

KMS の項目に採用すべきものは以下の様に 3 つのタイプに分けられる。

Type1 IS09001、14001 に準ずる項目 (①②)

Type2 IS09001、14001 をより詳しくすべき項目 (③④)

Type3 知識マネジメントに準ずる項目 (⑤⑥)

①継続的改善 (PDCA サイクルの導入)

IMS では継続的改善のための PDCA サイクルの導入を義務付ける。自らが計画を立て (PLAN: プラン)、実行し (DO: ドウ)、その結果を検証し (CHECK: チェック)、改善に結びつける (ACTION: アクション) というサイクルでシステムを継続的に改善していき、結果的に知的生産性を向上させることとする。なおこの PDCA サイクルは個人、組織両方に導入するものとする。

②省エネ・省資源、グリーン購入

知識マネジメントにおいても、省エネ・省資源という人類の命題は欠かせない。なぜならマネジメントを継続的に改善していく上での大前提が地球環境問題であり、またその意識を欠いては知的生産性の向上には結びつかない。一方逆に考えると、知識のマネジメントという行為は省エネ・省資源への一つのアプローチとも考えられる。

③コミュニケーション

コミュニケーションには 2 種類のものが考えられる。一方は日々の活動を通じてのアナログコミュニケーション。もう一方は電子会議室やメール等を利用したデジタルコミュニケーションである。以上を統合して適切に使う必要がある。

④学習

組織に属する者すべてに対し、知識マネジメントに必要な知識・技能を修得させる。そこで得た知識を Web も含めて集約、体系化し、蓄積され他の人々に再利用される。そういった効率的、構造的な学習体系を確立する必要がある。

⑤Web インテグレート

知識マネジメントの対象は人、モノ、金、時間としてそれらの資源をつなぎ合わせ、活用するものとしての情報を統合した知識である。それら全てを扱う上で導入すべきものが情報技術である。情報技術は、どれだけ情報をどれだけスピードで収集し、分析・分類し、伝達できるかという能力を左右する。研究室のグループウェアをより改良し、Web を通じてその一つ一つを統合する。

⑥知的生産性の向上

IMS 導入の一番の目的は知的生産性の向上にある。個人、企業の知識や企業の知識資産を組織的に集結・共有することで効率を高め価値を生み出すこと。そして、そのための仕組みづくりや技術の活用を行う。

<参考文献>

- 1) 京のアジェンダ 21 フォーラム KES タスクチーム
「京都環境マネジメントシステム・スタンダード (KES) 規格」
(2000)
- 2) 野中郁次郎/紺野登「知識経営すめ」(1999) ちくま新書